

## ヘーマチャンドラの論理学体系 ——為自比量を中心にして——

本学講師 長崎法潤

### 1

ジャイナ教の學僧ヘーマチャンドラ (Hemacandra, A. D. 1088—1171) は、晩年に *Pramāṇamīmāṃsa*<sup>①</sup> と題する未完の論理學書を著し、當時の哲學諸學派から影響を受けながら独自の論理學を体系づけ、ジャイナ論理學の展開に大なる貢献をなした。

一般に後期ジャイナ論書はそうであるように、この書においても

他の學派との交渉が著しく、それらの文献を數多く引用している。それらの引用文献を整理し、その内容を検討した結果を総合すれば、ジャイナ教文献、正理學派の文献が最も多く、次に仏教文獻がくる。正理學派からの引用文献のうち *Nyāyasūtra* から十六回引用され、そのうち最も多い。仏教文獻のうちダルマキールティ (Dharmakīrti 法称) の論書からの引用が最も多く、十七回におよんでいる。といふて引用内容に検討を加えた結果、*Nyāyasūtra* からの引用は、論証過程及び誤謬論に関するものが

多い。一方ダルマキールティからの引用は、ほとんど論理學の根本問題に触れている。この点から、ヘーマチャンドラはダルマキールティの論理學に深い関心を示し、それから最も影響を受けた

であることが推定される。それ故ヘーマチャンドラの論理學を論ずる場合、仏教論理學、とくにダルマキールティの學說との交渉に最も注意する必要がある。

このようにヘーマチャンドラは仏教論理學とともにダルマキールティに關係深いことが知られるが、ダルマキールティ以後の仏教後期の論理學との關係は見られるであろうか。出典が明らかになつた引用文献中に *Prajinakaragupta* の *Pramāṇavarttikabhaṣya* からの引用が一回なされているが、後期の代表的な論師からの引用は今のところ見出されない。しかしながら、その影響は見られないであろうか。

この小論では、とくに仏教との關係を考慮しながら、ヘーマチャンドラの為自比量の体系を概略的に明らかにしたい。現存するプラマーナ・ミーマーンサーは、彼が構想した五編からなる論理學書の途中、すなわち第一編 (*adhyāya*) 第一章 (*ālīka*) の途中で未完のまま止絶えている。第一編第一章において量 (*pramāṇa*) 一般に関する問題を提起し、次に現量 (*pratyakṣa* 直接的智) について論ずる。第一章から間接的智 (*parokṣa*) を論究するが、まず為自比量 (*svārthānumāna*) を扱い、第二編第一章では為他比量 (*parārthānumāna*) を論ずる。したがつてこのでは第一編第二章を中心にして、ヘーマチャンドラの論理學体系を明らかにしたい。

kṣa と parokṣa とを認める。後者すなわち間接的智とは、直接的でなく、特殊でない正しい認識手段であるが、それを smṛti

(記憶)、pratyabhijñāna (再認)、ūha (帰納論証)、anumāna (比量)、āgama (聖言) とに分類する。これらは独立の量ではなく、間接的智の種類にすぎない。この五種の分類は、九世紀のマニクヤ・ナンディ (Manikya Nandi) が Parikṣamukha-sūtra においてなし、彼は ūha を tarka とも称しているが、全体の定義はヘーマチャンドラのそれと根本的には差がない。

ヘーマチャンドラは、*smṛti* について次のよう に定義する。論理的関係の記憶は推理を成立さすために必要であり、比量の妥当性はそれなくしては不可能であるから、正しい認識手段であると言ふなければならない。pratyabhijñāna とは、直接的智と記憶が生ずる総合的な判断であり、「あれは必ずそれである」という同一なることの判断、「それはあれのようである」 (*tat-sad-śāṁ*) という類似の判断、「あれはそれに似てない」 (*tadvilakṣyam*) という異類の判断、「これはあれと異なる」 (*taṭpratiyogi*) という相違の判断とである。ūha とは、例えば「煙のあるといふ火あり。火のないところ煙なし」という論理的不離の関係の知識である。anumāna とは、所立と論理的に不離の関係にある一つの linga を有する能立より所立を推理する (同一性) とに対する批判としてなされたものである。ダルマキールティは因の所立法に対する関係を kārya (所作)、svabhāva (自性)、anupatalabhi (不認得) に分類する。所作因と自性因とは肯定的判断のための因であり、不認得因は否定的判断を成立さす因である。不認得因の論理的性格を吟味すれば、これは自性因から導き出されるものである。したがって、因の所立法に対する関係は、原因性と同一性とにまとまる。ところで、これに対し

### III

比量において最も根本的な問題は、正しい因の条件である。陳那は「因の三相」としてそれを規定し、正理学派では「因の五相」を認めている。それに対しヘーマチャンドラは、「因の三相」あるいは「因の五相」は能立と所立との論理的に不離の関係を述べたものにすぎないとし、不離の関係 (avinābhāva) とは同時生 (sahabhbhāva) と順次生 (kramabhbhāva) との関係にあるものであるとする。まず前者は、厳密には、同時に生ぜるもの同時生であることの必然性をいい、例えば、果物における色と味のように、一つのものの和合の関係、木とシンシャパーの場合における所遍と能遍との関係などがそれである。次に後者は、順次に生ぜるもの順次生の必然性を、*kṛtikā* 星と *śakata* 星との現れる関係のように順次に生起する関係、煙と火とのように果と因との関係などを含む。

ところでヘーマチャンドラが不離の関係を同時生と順次生とに分けたのは、ダルマキールティの tadutpatti (原因性) と tādāmya (同一性) とに対する批判としてなされたものである。ダルマキールティは因の所立法に対する関係を kārya (所作)、svabhāva (自性)、anupatalabhi (不認得) に分類する。所作因と自性因とは肯定的判断のための因であり、不認得因は否定的判断を成立さす因である。不認得因の論理的性格を吟味すれば、これは自性因から導き出されるものである。したがって、因の所立法に対する関係は、原因性と同一性とにまとまる。ところで、これに対し

ジャイナ教の側から最初に批判を加えたのがアカラナンカである。かれは、例えば、*kṛtikā* 星の生起から *śakaṭa* 星の生起を推理する場合、原因性でも同一性でもないし、所作因、自性因、不認得因の外に、さらに因を認めなければならないと主張する。マニクリヤ・ナンディもその立場を踏襲しているが、ヘーマチャンドラはジャイナ教側の主張を総合して同時生と順次生とにまとめたものと思われる。

「」のように能立と所立との不離の関係を同時性と順次性とによって解釈し、次に *sādhana* (因) は *svabhāva* (自性)、*kāraṇa* (能作)、*kārya* (所作)、*ekārthaśamavāyi* (「いのものにおける和合)、*virodhi* (相違) の五種であるとする。そのうち *svabhāva* 等の四是肯定的判断をもたらす因であり、*virodhi* は否定的判断を導く因である。*svabhāva* とは、例えば声が無常であることを証明する場合の所作性、あるいは所聞性である。*kāraṇa* とが、煙が水蒸気とか蚊の集りと疑われる時、火が煙を比量する因となる場合、特殊な雲の出現が雨のさし迫っているとの因である場合などである。*kārya* とは、特殊な洪水が出たことが山に雨が降ったことの因となる場合、火が煙の因であり、氣息が意識の因である場合などである。*ekārthaśamavāyi* とは、例えば一つの果物に属する色と味との関係、*śakaṭa* 星と *kṛtikā* 星との出現の関係、月がのぼることと海の潮との関係などである。否定の判断を成立させる因を不認得 (*anupalabdhī*) と称し、「」に瓶が存在しない。知覚条件を具しているにもかかわらず

知覚されないから」とするのが(1) *svabhāva-anupalabdhī* (畠性不認得)、(2) *kārya-anupalabdhī* (所作不認得) とは、「」に能力のある煙の能作因なし。煙なきが故に」(3) *kāraṇa-anupalabdhī* (能作不認得) とは、「彼に身毛堅立等の諸差別なし。燃火差別が近くにあるが故に」(4) *vyāpaka-anupalabdhī* (能遍不認得) とは、「」にシンシャバーナし。木なきが故に」である。これらの四不認得は肯定的判断をもたらす *svabhāva* 等の因から導き出されるが、これについてヘーマチャンドラは次のように記す。

「*svabhāva*, *kāraṇa*, *kārya*, *vyāpaka* は、それらの反対とは矛盾する。」*」* かかる、自らの所立を確立する。故に、それがないと自ら存在しないから、それらの「〔因の〕不認得はまた非存在を「証明する」正しい因である。」

すなわち、*svabhāva* 等の各々が認識されないことは、それらが非存在であることを証明する因となりうる。*anupalabdhī* を *svabhāva*, *kārya*, *kāraṇa*, *vyāpaka* の四種に分類したのはダルマキールティが最初であり、後期の仏教論理学者はそれを踏襲している。ヘーマチャンドラは仏教論理学の影響により、「」のよう三四種の *anupalabdhī* を認めたことは明らかである。ところでヘーマチャンドラは、一方では *ekārthaśamavāyi* への言葉を用いないが、*」* では *vyāpaka* を用いている。*ekārthaśamavāyi* との関連において *vyāpaka* と置換えたのか、何の関連もなしに、*anupalabdhī* の分類と同じ点がある *vyāpaka* を用いたのか、明確ではない。おそらく *anupalabdhī* の分類を仏教からの借用し、そ

れらと肯定的判断を成立させる因と関係をもつてゐるやうなからうか。

くーマチャンダラ以前ジャイナ論理学において anupalabdhī はアカランカとかマーリクヤ・ナンダなどによつてすでに説かれている。アカランカは svabhāva, kārya, kāraṇa, svabhāva-pūrva, uttara, sahacara なる七種に分類してゐる。それらの内容及び相互の関係等について別稿に論ずる(註1)。ジャイナ論理学で anupalabdhī を説くようになったのは仏教、おそらくダルマキールティの影響によるが、くーマチャンダラは、ジャイナ論理学における点の不統一を、ダルマキールティの学説をもとにじて整理したものと思われる。

相反する関係にある能立の存在によって所立の存在を(否定する)のが相違認得である。これについてくーマチャンダラは、

「相違(virodhi)」とは否定される(prativedhya)、「所作(kāryā)」能作(karapya)、「能遍(vyāpaka)」の相違(viruddha)及び相違所作(viruddha-kāryā)である<sup>(5)</sup>。」  
又記し「否定されぬもの」所作「能作」能遍のそれぞれを viruddha ～ viruddha-kāryā ～ 分けた。すなわち(5) prativedhyasya viruddha ～  
例えど、「寒の感覚がない」火があらかじめある、ダルマキールティはそれを svabhāva-viruddha-siddhi-upalabdhī(自性相違認得)と名づけている。<sup>(6)</sup> kāryasya viruddha ～ 「(火)に功能無礙の冷の能作因なし」火が

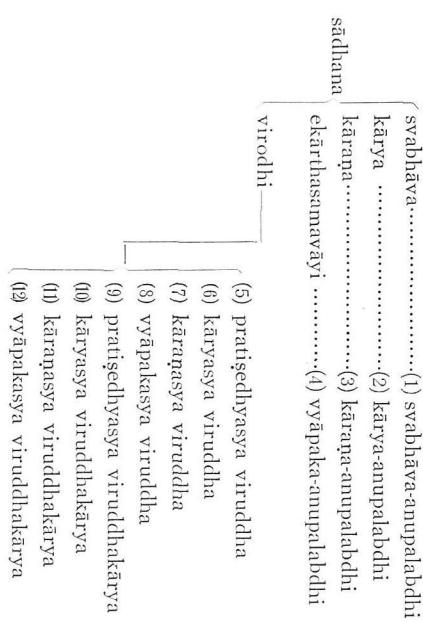
あるから」であり、Nyāyabindu ～ kāryaviruddha-upalabdhī(所作相違認得)と一致する。⑤ kāraṇasya viruddha ～

「彼に身毛堅立の差別なし。火があるが故に」であり、Nyāyabindu ～ kāraṇa-viruddha-upalabdhī(能作相違認得)と一致する。⑥ vyāpakasya viruddha ～ 「霜触なし。火があるから」であり、Nyāyabindu ～ vyāpaka-viruddha-upalabdhī(能遍相違認得)と一致する。次に同じ文章において agneḥ(火があらかじめ)を dhūmat(煙があらかじめ)にすれば、⑦ pratiṣedhyasya viruddhakāryā ～ kāryasya viruddhakāryā ～ kāraṇasya viruddhakārya-upalabdhī(所作相違所作認得)、kāraṇaviruddhakārya-upalabdhī(能作相違所作認得)、vyāpakkaviruddhakārya-upalabdhī(能遍相違所作認得)に相当する。⑧のうやく⑨といはダルマキールティの Nyāyabindu 中に説かれておらず、Mokṣākaragupta ～ Tarkabhbāṣa ～ Vidyākaraśāntī ～ Tarakasopāna の中で記された<sup>(7)</sup>の1書は最後期の仏教論書であり、ダルマキールティが Nyāyabindu ～ にて認めた十一種の不認得因(svabhāva-anupalabdhī, kārya-anupa, karapa-anupa, vyāpaka-anupa, svabhāva-viruddha-upa, kārya-viruddha-upa, kāraṇaviruddha-upa, vyāpaka-viruddha-upa, viruddha-kārya-upa, kāraṇa-viruddha-kārya-upa, viruddha-vyāpta-upa.) ～ kārya-viruddha-kāryā-upa, vyāpaka-viruddha-kārya-upa, kārya-viruddha-vyāpta-upa,

upa., vyāpaka-viruddha-vyāpta-upa. を加え、十六種に分類して、  
 一〇〇種の十ヶ種とすなはち anupalabdhi, viruddha-upa., viruddha-  
 kārya-upa., viruddha-vyāpta-upa. のぞれぞれを swabhāva,  
 kārya, kāraṇa, vyāpaka に分たるのやうだ。よりくへゝや  
 ハムカの分類せば、anupalabdhi, viruddha-upa., viruddha-kārya-  
 upa. が四種に分けたものであり、viruddha-vyāpta-upa. の四種  
 を全く認めてしない。一方ダルマキールティの分類は統一性を欠  
 け、viruddha-kārya-upa. だけ一種、viruddha-vyāpta-upa. だけ  
 一種のみを認めてしむ。したがつて、くへゝやハムカの分類は、ダ  
 ルマキールティのそれより一層統一化れていることが明らかであ  
 る。しかしながら viruddha-vyāpta-upa. の四種を認めていないか  
 ら、くへゝやハムカはモーケン・カラグラタヒヴィムヤーカ  
 ラシヤーンテヤムカの十六種の不認得を知らなかつたのではないか  
 わうか。ヒリヒドクヘヘチャハムカの分類において、ダルマキール  
 ティが認めない、(1)と(2)のうち、vyāpaka-viruddha-kārya-upa.  
 にひいて Jñanasārimitra (110-11 卷) が記している。かれ  
 はモーケン・カラグラタヒヴィムヤーカラシヤーナー・ティより少  
 し早く活躍したらしい。したがつて、くへゝやハムカの分類せば  
 ダルマキールティのみでなく、それ以後のショリヤーナ・シヨリー  
 ハムカの影響もあることが明らかである。

以上の考察により、くへゝやハムカの論理学、あるいは仏教の  
 影響をうけている比量の部分は、ダルマキールティはもとより、  
 それ以後のショリヤーナ・シヨリー・ムカを中心とする論理学者の  
 影響をうけてじる」とがわかる。この小論の最初に、トトト  
 ワー・マーラーに引用されている仏教文献について記し、ダ

ルマキールティからの引用が最も多く、それ以後のものは八世紀  
 の Prajñakaragupta からの引用のみ見出される記したが、以  
 上の考察がひいて、まだ出典の明瞭になつていない引用文献の  
 中で、後期の仏教論理学書からそのものや命ぜられている可能性があ  
 ることが明らかになつた。なお以上述べたくへゝやハムカの論  
 理学体系を図示すれば次のようになら。



## 註

① Pramāṇamimānsā おくへゝやハムカの總筆で、ある。

② 及び他の内容の趣點せば、次の拙稿に論じられてる。

A Study of the Pramāṇamimānsā—An Incomplete Work on Jaina Logic—(印度學之研究第十四卷第

大谷学会の年中行事の一つである秋季公開講演会は、昨年来提起された大学問題の一環の中や、大谷学会自体の在り方と関連して再検討を加えねばならない状況をつくり出していった。学会が学会としての機能を十全に發揮してゆくためには、当然に問われなければならない問題の一つであろう。こうした問い合わせの中で、一九六九年度の秋季公開講演会を開催する運びに至らなかつた。このことは、学問・研究を問う大学にあって如何なる意味をもつかを、会員の各自が、大谷学会の今後の在り方を検討する中から深く省察する必要があろうかとおもう。

## 〔附記〕

- (1) Pramāṇamīmāṃsā と照れかねて用文献に関するが次  
の拙稿に詳しく述べる。『Pramāṇamīmāṃsā 所引  
の經論』(1959) (印度學仏教學研究第十六卷第1号)  
『Pramāṇamīmāṃsā における正理學派の文獻』(大  
谷學報第四十八卷第1号)。
- (2) Pramāṇamīmāṃsā ed. by S. Saṅghavi, M. K. Śastry,  
D. M. N. Tīrtha, The Saṅcālakasinghi Jaina Grantha-

mālā, Ahmedabad-Cuttack, 1939, pp. 33—48.

1959), 「アーナ・マーラーの研究—著作年代を  
中止せよ」 (大谷學報第四十五卷第一号)。

(4) ibid. p. 45.  
(5) ibid. p. 45.

(6) Yuichi Kajiyama: An Introduction to Buddhist Phil-  
osophy, Memoirs of the Faculty of Letters, Kyoto  
University, No. 10, 1966, p. 153.

(7) A. Thakur: Jñānaśrīmitrānibandhāvalli, Tibetan San-  
skrit Works Series V, Patna, 1959, p. 190.

かかる状況において、委員会は、当初発表を予定していられた先生がたから研究発表のレジメを頂戴し、それを本誌に掲載する事によつて講演会に代えられるを得なかつた次第である。この事情を何よりも先ず、会員の諸氏に報告したい。また、発表を予定していられた諸先生にいろいろと迷惑をおかけした点、深くお詫び申し上げたい。なお、発表予定の梅津次郎先生には、昨秋來じ病氣入院中のため玉稿を頂けず、本誌に飾れなかつたとを附記しておく。

(雲井昭善)